

猪犬の頂点へ 新たなる地平を目指して ①

田宮 治

執念の止め刺し

ち込みもできたし、犬芸も思ったとおり強烈な咬み止めで、またたく間の勝負であった。

「よし、よし、これでよい」

願ってもない絶好のチャンスに物にできず残念でならないのは、マロ号の頑張りに対する気持ちと、せっかくの大猪を山野に朽ちさせたのではないかと思うことである。迫りくる日没のなかで必死の対策を取り、「これで必ず倒れる」と思って撃ったあの一発が命中しない訳がない。「ああなっただか……」「どうなったか」と想像しできない、そんな自分の修正を山梨の猟場で一人黙々とやっていた。

当然のことながら、ブイ号、カツ号、武蔵号、千代号の兄妹犬と、ヨシ号、マロ号、シロ号の二群を使い分け、銃はブローニング06である。大物こそ出なかったが、止め猪にはいつものように見事な撃

ち込みもできたし、犬芸も思ったとおり強烈な咬み止めで、またたく間の勝負であった。

「よし、よし、これでよい」

この調子ならば、見せてやりたいう止め刺しだって訳ないことである。絶対の自信を持って千葉の猟場に立ったのは、名物猪と戦った一週間後の二十二年一月十七日である。日曜日とあって北嶋氏も家族全員に見送られ元気である。加藤氏も私も、「猪を獲ってくるぞ」と笑顔で手を振り出発である。

当然のことながら、ブイ号、カツ号、武蔵号、千代号の兄妹犬と、ヨシ号、マロ号、シロ号の二群を使い分け、銃はブローニング06である。大物こそ出なかったが、止め猪にはいつものように見事な撃

な訳で、戦いを生き延びた、ぐれ猪が一月頃から銃猟のターゲットになるのだから、やっぱり犬芸ができていて、それを使いこなせる猪猟人でないとなかなか成果が上

がらなくなってきた。関東猪犬猟

山彦会千葉支部は若者が中心で現職ばかりなので忙しいらしく、今日のメンバーは北嶋氏と加藤氏だけである。私は自己流に徹し、単独猟よろしく猪探しのできるこの日に懸けていた。北嶋氏と二人で、のんびり、ゆっくり、幻となつた大猪が越えた大峰筋に乗って、マロ号の鳴き声が途切れた辺りを注意深く探すが、大猪は見つからなかった。

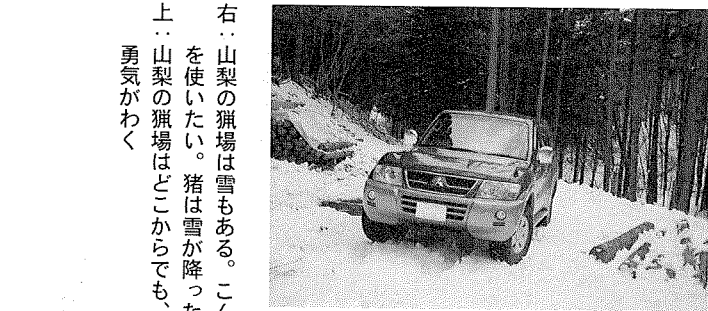
私の犬たちは悪いことに猪が動いているうちは必死で咬み込み戦い続けるが、死んでしまうとさっさと帰って来るのである。咬み倒した猪や即死せずに行き倒れた猪

には、ほんの少し立ち寄るが、鳴くとか咬むのは訓練中の若犬ばかりである。一軍犬ともなれば、猪の臭いを嗅ぐくらいだ。すぐ先の狩り込みを続けるので、見通せる山梨あたりの山ならばその現場にすぐ気付けるのだが、千葉のように藪の中では発見しづらいのである。もう一週間も経つので足跡もない。

「この辺なのだがなあ……」

それでも諦め切れずに、大猪と対決した出峰の一本先の小峰を下りることにしたのである。加藤氏には、猪が出れば必ず行くはずのタツで待ってもらっているのので、「大猪よ、元気な姿を見せてくれ……」と祈る気持ちで狩り続けていた。

北嶋氏の話では、この小峰の下に大猪の足跡があったという。その現場に行ってみると、粘土質の



右：山梨の猟場は雪もある。こんな時は体の大きいパワーのある犬たち
 を使いたい。猪は雪が降ったらチャンスである
 上：山梨の猟場はどこからでも、日本一の富士が望める。心があらわれ、
 勇気がわく

地面に一つ、確かに大きな足跡が
 残っていた。ただひとつだけで、
 前も後も落ち葉と藪でよく判別で
 きないが、どうも鹿のようであ
 る。

「よくこの足跡を見つけたね」
 「田宮さんが撃ったのだから、
 必ず当たっていると思って、下の
 県道から大沢を登って探している
 時に見つけたのだよ」

大沢の登り口にピカチュウのタ
 オルが落ちていたけど「あれ、田
 宮さんのものですよ」と言っ
 ている。確かに孫娘のものだっ
 たが、ピンクや黄色が入って目立つ
 ので、巨人軍のオレンジのタオル
 など一緒に狩りには使っているも
 のである。「間違いなく、その上で撃った
 のだよ」

そんな話をしながら、まだ諦め
 きれない気持ちをやっとのことで
 新しい猪との出会いに切り替えて
 いた。

この大峰から枝分かれしている
 小峰を一本ずつ探して、猪を狩り
 出す作戦である。真冬だというの
 に、今日はポカポカの小春日和で
 ある。いつもは猪を追っかけ必死
 であるが、のんびり、ゆっくりの
 猪探しなので、眼下に広がる山々
 の風景がとても美しい。

向かい山のタケノコ農園が、ま
 るで庭に植えられた孟宗竹林のよ
 うにきちっと手入れされ、その下
 に千葉の山裾によくある山田が広
 がっている。

無風で静かな山林に、枯れ竹の
 割れるバリッバリッという大きな
 音が猪の飛び出しではないかとハ
 ッとする。何ともいえない良い気

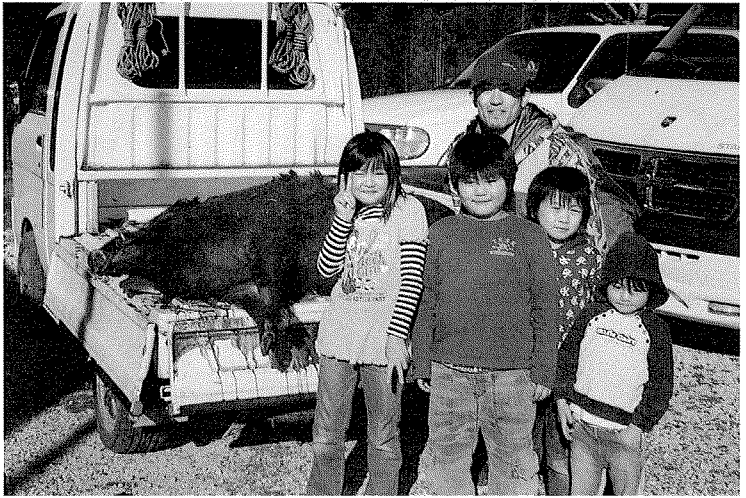
分になれる猟日和である。

突然「バーン」と、向こうの山
 で銃声がある。朝出会った猟友石
 橋氏のグループのようだ。「獲れ
 たかね」と言う北嶋氏に、「獲れる
 と良いね」と答える。

私たちも頑張らねばと思って出
 峰のどん詰まりまで攻めるべく、
 中ほどの少し上りにさしかかっ
 た。その先の小高くなっている小
 峰から杉林が下に続き、県道に落
 ちているが、あと四、五〇〇メートルだ。
 「まだ進みますか？」と立ち止ま
 る北嶋氏に、「まだまだだ……この
 先に猪がいるよ」と話す。

大峰筋はあれほど注意して猪探
 しをしてきたのだから、猪が潜ん
 でいるとしたら、この先以外ない
 と思っていた。

のんびり楽しみながら、ゆっく
 り（犬たちの狩り込みを見極めな
 がら）狩り進むのは、私の猪猟の
 基本である。単独や二、三人でや
 る猪猟では、あくまでも止め犬群
 が中心となる単独猟が原点であ
 る。二、三人猟でも、当然のこと
 犬群がきちっと猪を止め切れない
 ことには勝負にならない。



山彦会千葉支部長北嶋氏の子供たちと事務局長の加藤氏。「ハイポーズ」

しかしながら、止め切れずに飛ばれた時でも、その先にタツが張れたり、止め現場に寄り付くのも、一人が扇状に走ることや、一人が先回りして猪を迎え撃ったり、単独では決してできない「猪を挟み撃ちにする」というような最大限有利な作戦が取れるのである。猪止め犬群を上手に使いこな

し、最高の犬芸を引き出して結果に結び付けられるのは単独か、二、三人までが一番良く、それ以上で大きく山を取り囲むグループ猟では、猪止め犬本来の持ち味はなかなか出しづらいのが現実である。当たり前前で、「止め犬」というからには、猪を止めて勝負す

る犬たちなのであり、タツに追い込む「追い犬」ではない。

私が推し進めているのは、止め犬による止めた猪と勝負している単独猟が常である。止め猪を撃ち獲るだけなのだから三人もいれば十分であるといっているのでは

り、戦いぶりを見てもらって、きちっと基本を覚えてもらって急成長していただきたい。そのために二人でも三人でも一緒に歩き、実践しているのである。

猪猟に限らず、何事を達成するのも「三人寄れば文殊の知恵」といわれるように、三人の持ち味を生かし、その成果を先に繋げることは忘れてはならない大事と思っているところである。

この年になっても教える中で教えられる大事が多く、さらなる挑戦と日々の進化を心掛け、懸命に頑張り続ける毎日である。

単独猪猟の基本

何事を完成するのも基本が重要である。基本がしっかりできていないことには、何十年猪猟をやり

続けようと、思いどおりの楽しい猪猟などできるものではない。たかが猪猟でも、頂点を目指すのであれば、まず自分の足元から固め、どこまで登っても決して揺るがない土台、つまり猪猟の基本をきちっと学ぶことである。

「単独猪猟の基本」を完璧に実践したり、解説するのは人それぞれので考えで成り立っている現実であってみれば、なかなか「これぞ単独猪猟」と言い切れないところも多く、結論付けるのは大変である。

そんな大変な世界、つまり人様のやり方や考え方まで統一したり、結論付けるつもりはない。元々そんなごちゃごちゃが嫌だから単独猟の道を選んだのであり、誰もが追うべきは「わが道」であり、挑戦する基本も、自分で見つけた一番良いもので猪猟を押し進めるべきである。

この事実を前提に、私がやってきて「これぞ猪猟だ」と信じる単独猟を基に山彦会千葉支部の若者たちと一緒にやっている良い猪猟や、参考になって明日に繋がる実



上：猪跡だぞ！ 千代号、ゆっくり行こう。このあと、大物を止める。雪上の良い猪跡は追うとよい。案内近くにいるもので、発見すればいただきだ。猪は雪に弱く、逃げててもまたすぐに止められる

下：単独猪猟では、犬芸が良く、止め切れる犬たちでない、思いどおりの楽しい猟など、まずできない。タツがいらないのだから当たり前のことである

戦の様子を記述してきたのであるが、ちょうど今日、「念願の止め刺し」の大勝負を実戦中である。私はこの一戦に懸ける全員の頑張りや、犬群の戦いぶりこそが、まさに単独猟の神髄（基本）だと思っているので、前提解説を挿入することです。少しでも参考になり、良い猟案内や楽しい猪猟が明日に繋が

ってこれれば幸甚だと思つてのこ
とである。誰も望む、気楽で何も拘束のない単独猟にあつては、当然のこと、その基本も人それぞれで努力し、頑張つて、自ら納得ゆくものに完成すべきことである。そんな意味で、私が考える単独猟の基本は、一人で簡単に「どん

な猪でも撃ち獲れること」である。そして、そのためにいつでもどこへ出掛けても、山の様子を見ただけで犬群に綱一本付けずに自由に狩り込ませ、上手に猪を止め切れる一流犬群を作ることである。その一流犬群を思いどおりに使いこなすことである。あくまでもこの三条件は、私が

長年苦勞して編み出した俺流の単独猟にあつては、必ず完成しなければならぬ大事である。これらがうまくできなければ、とても思いどおりの楽しい猪猟は成り立たない。いつでも、当たり前のように、望みどおりの猪猟ぐらい簡単にできないことには人様には教えるとか、見ていただくことなど無理な話であり、「有言実行」こそが「本物の実力である」と思っている。「さあ、見ていてくださいよ」と大猪の寝屋止め撃ちや、咬み落とす猪と併走しての止め撃ちなどは、前記の三条件がきちっとできていないことにはとても見てもらえるものではない。

まして、「止め刺し」は犬群の咬み止め芸が、それこそ超一流芸になつていなければ無理なことである。そんな無理な猪猟でも創意工夫し、自分流にアレンジさえすれば、簡単に楽しめる猪猟に進化させられるのである。あくまで基本をきちんと作り、順次考へて補修しながら確実に登り極めてほしいものである。

(つづく)